

ロックを積み上げて作った即席の竈に薪をくべて蒸されていく。つきたてのからみ餅、あんこ餅、きなこ餅と温かいおでんが参加者に配られる。餅もおでんも食べ放題、子供たちのはしゃぐ姿がほほえましかった。屋内でのされた餅は納めた会費の額に応じて後日、参加した各戸に配られた。

このように餅つき会は近隣社会の親睦会として

定着したかに見える。各家庭で餅をつくことが困難になっている現状では、餅つき会は親睦のほかにも正月用お餅を共同してつくるといった実利的意味ももっている。またそれは子供たちに米の伝統的蒸し方や餅のつき方を実際に学ばせる機会ともなっているのである。

SF「20年後の大学教育」

三 上 岳 彦

2003年某月某日。A大学地理学教室のB教授は、午後の地形学の講義準備に余念がなかった。先日フィールドで撮影してきた断層地形のビデオテープを学生に見せることになっている。教室に備えられているテレビは、30インチと大型の上、走査線が1000本以上もある高品位TVと呼ばれるもので、数年前から各家庭でも普及し始めてきた極めて画質の高いものである。しかも、付属のカラー・プリンターから任意の画面をプリントすることができるので、教材としての利用価値は高い。衛星写真の直接受画装置と併用すれば、教育効果はさらに増すだろう。

衛星写真といえば、A大学本館の屋上には静止気象衛星からの電波を受信するパラボラ・アンテナが備えられており、C教授は気候学の研究・教育に受信された雲画像を用いている。衛星写真とともに欠かせないのが、各種の気候データであるが、10年程前にD大学地理学教室に大規模な気候データバンクが完成し、今では多くの大学の地理学教室の端末装置から随時必要なデータを取り出すことができるようになっている。しかも、このデータバンクには、観測時代のデータだけでなく、数百年にわたる歴史時代の各種気候データ（天候、災害記録、花粉分析データ、年輪分析データなど）が入力されているため、気候学だけでなく地理学・歴史学の諸分野での利用価値も高いと思われる。

C教授は気候学実習という科目を担当している

が、小気候の観測法も昔とは大分変わってきた。20年程前までは、野外での気温観測といえば、ゼンマイでファンを回すアスマン通風乾湿計がよく用いられていたが、最近はほとんどその姿を見ることができなくなっている。気温や湿度の移動観測では、何よりも応答速度の速いことが要求されるため、現在では電子式デジタル表示の小型乾湿計が幅をきかせている。マイコンとプリンターを内蔵しているので、観測値をノートに記入する必要もない。フィールドから持ち帰ったデータは、教室のミニコン（能力的には20年前の大型コンピュータに匹敵する）に記憶させ、種々の分析を行なうことができる。等温線図なども、昔は手で描いたものだが、付属のXYプロッターで自動的に作成される。学生に要求されるのは、等値線をいかにうまく引くかという能力ではなく、コンピュータを用いていかに効率よく観測結果を分析・処理するかという能力である。

このような傾向は、地形学の教育でも顕著になっている。B教授は、地形計測実習の時間に、コンピュータ・グラフィックスを導入することに熱心であった。ブロックダイアグラムの自動図化は、すでに20年以上前から行なわれているが、これを立体映像化することに成功したのである。ホログラフィーを応用した装置で、日本全国の格子点高度データ（磁気テープに入力されている）をもとに、任意の地点で、任意の高度から、任意の方角を俯瞰した時の立体地形画像が、専用の立体映像

装置で見られるようになっている。同じ原理で、切断面図や谷埋め図なども立体画像化することができる。

この装置は、最近では自然災害予測などによく使われている。例えば、土石流などによる山地斜面地形の変化を予測するのに、格子点の高度だけでなく、地質や植生、土壌などのデータを入力しておき、これに一定量の降雨があった場合にどのような変化が起こりうるかを、立体アニメーション画像として表現することが可能になっている。自然災害だけでなく、都市型災害のような人為的

災害の予測にも役立つだろうと思われる。

ところで、A大学地理学教室には人文地理学担当のE教授とF助教授がいるが、ともにアンチ・コンピュータ派で、20年前とほとんど変わらない教育方法を堅持している。しかも、学生の人気はB教授やC教授よりも高いのである。生まれた時から、やれパソコンだOAだといったテクノロジー万能の世の中を経験してきた彼らにとっては、大学での授業時間くらいはせめて息ぬきの場としたかったのかもしれない。

セベリア雑感

栗原尚子

1980年12月初めから1981年2月半ばまで、海外学術調査でセベリアに滞在したときのことである。スペインを訪れるのは3度目であったが、plurinacionalと形容され、多様な「地域」によって特徴づけられるこの国にあって、前回の調査地域カタルーニャとはひじょうに異なり、ある意味ではスペイン的なアンダルシアで生活できるという期待は大きかった。現在のセベリア市は人口30万人。これといった工業活動がなく、グアダルキビル川流域にひろがる農業地域の中心町であるが、かつては、ラテン・アメリカとを結ぶ表玄関であったことはよく知られている。このラテン・アメリカとの歴史的つながりを現在象徴しているのは、古文書館である。著名なHamiltonが、この史料を使い、新大陸から搬入された金・銀の量を産出したことはよく知られている。古文書館に利用されている建物は、かつてセベリア商人の活動の中心であった取引所で、王宮アルカサルや大寺院に近接している。この中心地の北側には、かつてのシナゴグであるサンタ・クルス地区があり、この街区の一角にあるアパルタメントが、セベリア市での居屯地となった。迷路のような街路からなる歴史的なこの街区は、観光の対象であり、多くの観光客が訪れるが、滞在期間中はオフシーズ

ンのため、それほどのにぎわいを示してはいない。それでも窓の下に時々日本語がとびかっていることもめずらしくはない。セベリア市での仕事は、調査地であるシェラ・モレナ山中のカサージャ・デ・ラ・シェラに関して、関連機関との接触と関係資料の収集にかけずりまわることであった。資料・文献収集では、セベリア大学文学部の地理学教室を利用させていただいたが、この建物は、王立のタバコ工場であったところで、かのカルメン活躍の場として知られる。セベリア大学の地理学教室の歴史は古くはない。初期には、農業経済史家として優れた研究業績を発表しているA. M. Bernalが地理学を担当していたこともあり、研究成果がスペインの最も代表的な学会誌Estudios Geograficoに寄稿されている。

仕事の合間をぬっての楽しみは、街の中を徘徊することである。丁度オレンジがたわわに実をつけている時期で、街路のオレンジを見あげていると、これはママレードにしかならないよと声をかけられた。アパルタメントでの生活は、スペインでの初めての自炊経験で、近くの乾物屋、八百屋などで近所のオバさん達にまじわり、井戸端会議をたち聞きしながら買物するのが楽しみのひとつになった。八百屋で、日本人はこれが好きだろう